

草葺きの住居に住んでいた 一失われゆく兵庫の草葺き屋根

ひとはく地域研究員 山崎 敏昭

1. はじめに

私は、ひとはく地域研究員として、三田市域を中心に播磨地域や丹波地域、丹後地域の草屋根を訪ねて記録しています。数万年にさかのぼる私たちと草屋根のおつきあい。まだまだ健在と思わせる、人や住居、地域との出会いに元気づけられています。

さて、「草葺民家」について皆さんはどういうイメージを持つでしょうか。今の田園風景のなかの植物で屋根を葺いた建物を、「茅葺民家」と呼ぶ皆さんが多いことでしょう。それも正解です。今ある民家の屋根の素材は「茅（カヤ）」のものがほとんどだからです。

ススキ科の植物の通称である「茅」は、草のなかでも丈夫で長持ちする屋根葺きに持ってこいの素材でした。けれども、大きなカヤ場がない地域では、少ないカヤを溜めておいて相互にやりくりし、不足した分は対価を払って購入しなければなりません。

そうした理由もあって、昭和までは、いろいろな素材で葺かれた屋根がありました。大きな川などがある場所や湖がある地方では川原や湖岸に群生する「葦」を使い、田んぼや畑の多い地域では「稲わら」や「麦わら」、笹やぶが多い地域では「笹」などが使われていました。また、表面が「茅」であっても屋根のボリュームを増すために稲や麦わらを使っている家が普通でした。収穫の時、コンバインなどの機械で「わら」を細かく刻んでしまう今では却って「わら」を集める方が、「茅」を集めるよりも大変かもしれません。

今回は、こうした植物で葺かれた屋根を「草葺（くさぶき）」屋根としてお話を進めます。草屋根の歴史は古く、おそらく私たちの祖先が木の上の生活から、草原へと生活の場を移した数十万年からの歴史があると思われます。また、日本だけでなく東～東南アジア、ヨーロッパ、アフリカ等、広く世界各地でいろいろな草葺き屋根が見られます。

2. ひとはく周辺の草葺き屋根

ひとはく（兵庫県立人と自然の博物館）が位置する兵庫県三田市周辺は、「摂丹型（せったんがた）民家」と呼ばれる民家タイプの分布圏の西縁に位置します。摂丹型民家は、屋内の土間と床上部分を縦割りにし、床上部分を正面から「エンゲ（縁側）」、「ザシキ（座敷）」、「ダイドコ（居間）」、「ナンド（納戸・寝室）」と一列に配置する民家のタイプです。また入母屋屋根の三角形の妻側を正面に見せることも特徴とされています。このタイプの分布は、明治時代までの地域区分であった、摂津国の北部から丹波国、京都市街を含む山城国の一部にひろがり、特に数多くみられる北摂津から丹波高原の地域



図1 麦わらと銅板葺きの草葺き民家群

(三田市高平地区)

(右) 摂丹型民家の分布域



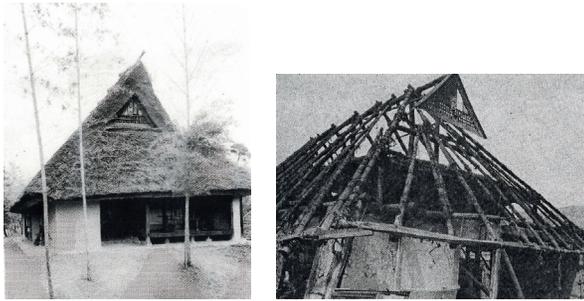
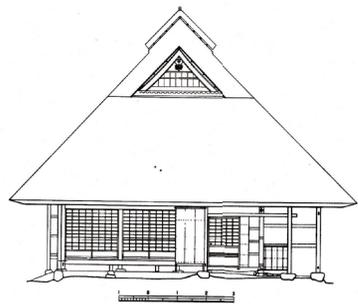


図2：摂丹型民家の破風の旧観 大阪府域
大阪府能勢町旧泉家住宅（左：修復後、右：移築解体中・破風板の取り付け状況がよく観察できる）*参考文献より



1



2



3



4

図3：摂丹型民家の破風の旧観 京都府域
1綾部市（旧地端徳町）岡花家住宅（修理前）、2亀岡市桂家住宅、3亀岡市中川家住宅 4旧園部町小林家住宅
*参考文献より

名にちなみ、1970年代後半から「摂丹（せったん）」型と呼ばれるようになりました。

3. 草葺屋根の地域性

今日の建築学や民俗学で用いられている民家の類型は、部屋の配置による分類が基本となっています。けれども兵庫五国（摂津・播磨・丹波・但馬・淡路）や、隣接の京都府丹後、丹波地域の民家を訪ねてみますと、平面だけでなく屋根の形も地域それぞれに違ってきます。

試みに、ひとはく周辺の「摂丹型民家」の屋根を示します（図2～5）。入母屋屋根の小屋根部分を「破風（はふ）」といいます。その部分に注目していただくと、京都府、大阪府、兵庫県とおもむきが変わっていることがわかります。また、兵庫県内でも播磨に近い三田市周辺の旧有馬郡と丹波地域、大阪府に近い阪神地域の西摂平野とでは様子が変わっています。破風を強調することが摂丹型民家の特徴とされていますが、実は分布圏のなかで大きく様相が違っていました。

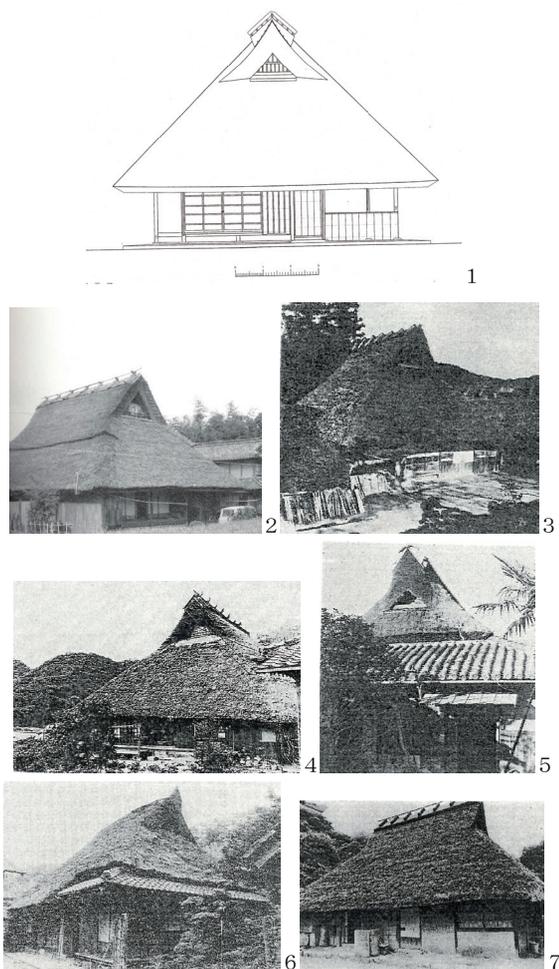


図4：摂丹型民家の破風の旧観 兵庫県域（1）

1丹波市旧友井家住宅（修理前）、2篠山市二之坪の住宅、3宝塚市近谷家住宅、4猪名川町清水谷家住宅、5尼崎市平瀬家住宅、6川西市清水家住宅、7川西市福田家住宅 *参考文献より

こうした様相の違いについて大工さんに聞いても良く分かりませんでした。そしていろいろと調べると、どうやら屋根の葺き方が関わっているということがわかりました。江戸時代の文献や古文書には、播磨の三木の大工さんが丹波や丹後、京都にでかけてお寺や神社、民家を建てていたことが記されています。また、三木以外に若狭や富山の大工さんも来ていたようです。けれども屋根葺きはこうした大工さん達の領域ではなく、屋根職と地域の人たちが一緒にやっていたということが、今残っている民家の屋根の手法や記録からうかがえます。



図5：摂丹型民家の破風の旧観 兵庫県域（2）

旧有馬郡域の状況

1神戸市四鬼家住宅、2西宮市梶本家住宅、3三田市赤松家住宅、4三田市貴志地区内の住宅（※破風口がよい）
*参考文献より



図6 兵庫県指定有形民俗文化財旧東家住宅（宝塚市）の今と昔

4. 屋根は変化する？！

屋根葺きの職人さんに伺いますと、昭和の中ごろまでは、各村に一人くらいの割合で屋根葺きの職人が居たといえます。何故なら、村々で少ない茅をお互いに融通したり、わらを持ち寄り、毎年どこかの家で葺き替えの仕事があったからだそうです。また、屋根の葺き替えも今みたいに一度に全面というのではなく、今回はこの面、次はその面とそれぞれに傷んだ場所から順を決めて部分ごとに、屋根の点検を兼ねて葺いていたそうです。

やがて、蓄えの出来た家から瓦葺きとなって行き、そうしたつながりから一軒、また一軒と抜けて行き、互いの茅やわらの融通も難しくなり、屋根職さんも屋根の板金屋さんになり、今やトタンや鋼板覆いの家がほとんどで、草葺の家は数えるほどになっています。

5. 草葺屋根のこれから—「草葺きの住居に住んでいた」過去形にしないために—

今なお、三田市や神戸市北区、篠山市、丹波市、猪名川町、宝塚市西谷地域、川西市北部は、鋼板で覆われた草屋根も含めて3000棟近くが残る、全国でも屈指の草葺屋根民家地域です。これらの草葺民家は、建替え等で徐々に失われつつあります。

草葺屋根が失われることについて、いろいろと話題になります。人の暮らしとともに草屋根がどのように守り伝えられてきたのか、そのあたりの所を明らかにすることが、次の世代に継承するしくみ作りに寄与するのではないかと考えています。

日本の伝統的な田園風景を伝えるもの、なつかしさを感じさせるものとして語られる草葺民家のうち文化財や観光地化などで活用されているものはごくわずかです。ほとんどの民家は今も現役の家です。その屋根の下にはそれぞれの家族の暮らしがあります。

時代とともに暮らしは移り変わります。文化財の遺構としてではなく、人が住み続けている理由について、また住み継いでゆく理由について、考えて行きたいと思います。

引用参考文献：山崎敏昭・黒田龍二 2014.06 「摂丹型民家における破風考」『日本建築学会近畿支部研究報告集』

第54号